
猫と話せる少年

描迷 氷菓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫と話せる少年

【Nコード】

N8595P

【作者名】

描迷 氷菓

【あらすじ】

少年と猫のちょっとしたしんみりしたお話。

「所詮、その程度だったんだよな」いつも話してる猫に猫じゃらしを向けながら僕は呟いた。

猫は猫じゃらしを見つめながら言う。「そんなことないよ。いつも君はそうやって諦めるんだ」

「猫に理解されてたまるかよ」と僕は溜め息をついた。

「私も君に猫語を理解されては困るんだけどね。だから、お相子様だよ」猫は前足で耳を掻いた。

「理解したくて、理解したんじゃないよ」

「君は早く、人間を理解した方がいいよ」猫にまでそんなことを言われてしまった。「私は、君は人を理解できないんじゃないかって理解しないようにしてるのが見えるよ」

「知るかよ、そんなの」僕は、猫じゃらしを捨てた。猫は飛んでいく猫じゃらしを目で追って、動くこともなく、僕を見つめた。

「そうやって、逃げるんだ」にやあ。と笑った。「だって、君は分かっているはずだ。私よりも、こんな猫よりも、自分自身のこと、分かるはずだ」

「もう、苦い思い出でしかない。」

猫は笑うのをやめた。

潤んだ大きな瞳で僕を見上げた。

僕は掌をすっぱりと収まる猫の小さな頭に乗せた。優しく撫でる。

「私は、君のそんなところが嫌いだ」猫はそう言って、僕の手から逃げた。

また、いなくなった。

また、来てくれるならうれしいな。

明日は違う猫かも知れない。

もしかしたら、犬かも知れない。

ああ、犬はあんまり好きじゃないんだな。

もしかしたら、大嫌いな人間かも知れない。

ああ、アイツ等は苦手だな。

もう、失うのは嫌だな。

僕は、ああ。と明るい水色をした空に向かって呟いた。

その言葉は、天に昇る訳でもなく、僕にそのまま落ちてきた。

僕は身体で、自分の呟きを感じた。

それはただ、悲しみの湖にまた一滴、悲しい水が増えたただけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8595p/>

猫と話せる少年

2011年1月8日23時48分発行